

『枕草子』の秋の情景

—後宮文化を照らす月—

赤 間 恵都子

一 はじめに

『古今集』をはじめ三代集で四季の巻の歌数を比べてみると、秋の巻の歌数が最も多く、春が秋に次いでいる。一方、『枕草子』においては春の季節のイメージが強く、秋はほとんど注目されてこなかった。それは、あまりにも有名な「春はあけぼの」のフレーズと、日記的章段に描かれる清涼殿の桜の演出など、春の華やかな場面の印象が強いことによると思われる。しかし実のところ、『枕草子』は四季を均等に取り上げる作品である。そして三代集で最も歌数の少ない冬の季節こそ、定子後宮を描く『枕草子』の主題とかわかりが深いことについて先に拙稿で論じた¹⁾。本稿では和歌で重視される秋の季節に焦点をあて、『枕草子』の秋がどのように描かれているかを概観した上で、月が出ている場面を取り上げ考察していきたい。日本文学において秋を表す最も代表的な風物と言えば紅葉であろう。『古今集』秋下の巻では七割近くの和歌が紅葉を詠み込んでいる。一方、『枕草子』の紅葉の用例は五例、そのうち一例は職御曹司で尼乞食（常陸の介）が歌った歌謡の詩句で、二例は「花の木ならぬは」（三八段）の紅葉しない木を指しているので、実際の紅葉

は「風は」（二八八段）と「神は」（二六九段）の二例のみとなる。

『枕草子』に秋の紅葉がほとんど描かれることは、散る桜が描かれたのに対して、『枕草子』の場合、例えば清涼殿の段で良房の歌を背景に中宮定子に譬えられた満開の花は、決して散らない、散らせられない桜であった²⁾。つまり『枕草子』では、中関白家凋落のイメージを想起させる散る桜を描かなかつたと推測されるが、まして紅葉は移ろい、散り、流れる風情を詠むものゆえに取り上げられなかつたと考える。それでは、『枕草子』の秋の場面として選ばれたのはどんな情景だろうか。

二 枕草子の秋

『枕草子』の秋について、秋の語が使用されている記事と、秋の季節に相当する七、八、九月のそれぞれの月の記事を対象に、何が描かれているか見ていきたい。対象となる章段は類聚的章段が七段、随想的章段が十段あるのに対して、日記的章段は四段と少ない。まずは、類聚的章段と随想的章段に描かれる秋の風物を抽出してみる。

(1) 秋の草花・秋の野

「草の花は」(六五段)には様々な秋草が取り上げられている。春から初夏の花を対象とする「木の花は」の段が宮廷で目にする樹木の花を選択しているのに対して、「草の花は」の方は野に咲く花が主体である。全十六種類(能因本では春夏の花を加えて十八種類)を取り上げ、その形や名称に着目し、穂が開いた薄に老残の身を見立てる等、自由な批評が繰り広げられる。「秋の野」については、「かきまさりするもの」(一一三三)の一つにも挙げられている。平野神社の齋垣を這う紅葉した蔦を見て、貫之の古今歌を思い出している記事(「神は」二六九段)が紅葉の一例となっている。

(2) 秋の虫

初秋の夜に鳴く虫の声は和歌世界における代表的な秋の風物である。虫の声は、初段の「秋は夕暮れ」で鳥と雁を描いた後に挙げられ、「はたいふべきにあらず」と最高評価されている。また、「虫は」(四一段)は、鈴虫、松虫など和歌によく登場する秋の虫の列挙に始まるが、その後の和歌に詠まれない虫たちの描写の方が詳しく、虫に因んだ伝説や実態について具体的に記していく。なお、晩秋のきりぎりすは「あはれなるもの」(一一五段)にも取り上げられている。

(3) 雨風・嵐

残暑の厳しい日々も雨が降る毎に涼しくなり、時に野分の雨風が吹き荒れる秋は一年中で最も気温の変化が激しい時節である。それを肌で感じ取り、夏中使用して汗の香が残る薄い綿衣をすっかり被って昼寝したり(七月ばかりに)四二段、もう一枚重ねて寝たりする様子(「風は」一八八段)が日常生活の一コマとして描かれ

ている。「病は」(一一一段)では、そんな秋の時節だからこそ、胸を病む美女の姿態も風情ある対象としてとらえられるのだろう。寝苦しい残暑の夜に見出した月(七月ばかり、いみじう暑ければ)三四段)については後に取り上げることとする。なお『枕草子』で唯一の散る紅葉が、「風は」(一一八八段)で、「ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり」と描かれるが、そのすぐ後には晩秋に葉が落ちきった庭を「いとめでたし」と評している。

(4) 七夕行事・重陽の節句

旧暦の秋に入って早々に七夕行事がある。節句の天候について述べた章段「正月一日は」(八段)では、七夕の夜の星空を期待していた様子がかげえる。また、九月九日は暁方に雨が少し降って重陽の節句で用いる菊の露が得られる天候をよしとし、「節は」(三七段)では、その菊を絹に包んで献上することが記されている。九月の雨夜の翌日には朝日を受けた前栽の露をとらえ、特に蜘蛛の巣にかかった露を玉に譬える情景(九月ばかり)一一五段)は『古今集』二二五番歌³⁾を散文に置き換えたような描写になっている。

その他の行事に関わるものとしては、七月十五日の盆に詠まれた道命阿闍梨の和歌説話(「右衛門の尉なりける者の」二八七段)と、稲刈りの風景を観察した記事(「八月つこもり」二二一段)がある。

以上のように、類聚的章段と随想的章段の秋の記事には和歌世界と重なる対象も扱いながら、作者自身の目で見て身体で感じた実体験に基づく描写を加味し、繊細で情趣ある場面が描かれている。それらは作者の私的な日常生活を対象としたものというより、後宮で催される年中行事や同僚女房たちと共に営む後宮生活の中へとえられた情景であっただろう。

次に日記的章段の秋をみてみよう。秋および七、八、九月の語を含む日記的章段は五章段あるが、積善寺供養の段の最後に漢詩引用された「秋はまだしく侍れど、夜に九たびのほる心地なむし侍る」の用例は秋ではないので該当しないとされた。それ以外の秋の時節を描いた章段は、職御曹司での殿上人との交流（「職御曹司におはしますころ、木立など」七四段）、八月十余日の月夜（「職におはしますころ」九六段）、九月十日の道隆の法事（「故殿の御ために」一二九段）、太政官朝所での七夕（「故殿の御服のころ」一五五段）の四章段になる。そのうち二段は道隆の服喪中、二段は職御曹司時代の章段で、秋の語を含む日記的章段に中関白家栄華期のものはない。

三田村雅子氏は「定子の栄華が確固としたものである時は、公的なモチーフによる〈春〉の記事が選ばれ、栄華が翳り再び定子が后として認められるまでの暗鬱な日々、清少納言の個人的な好みが強くうちだされたかのように、春以外の季節が選ばれてくる」傾向について述べている。道隆喪中の章段には定子の姿が描かれなくなり、長徳の変を挟んで定子が再登場する職御曹司時代の章段では、後宮イベントを牽引し積極的に活動する清少納言の姿が描かれることが思い合わされる。日記的章段の秋は、表舞台から身を引いた定子が静かに過ごす季節として相応しい。ここでは定子の代わりに清少納言が後宮文化を先導していくことになったのだろう。

そのような秋を扱う日記的章段のすべてが夜の時間帯を描き、さらに一五五段を除いた三章段に月が取りあげられていることに注目したい。一五五段は七夕の夜の記事だが、節句の天候を述べる「正月一日は」（八段）に、「七月七日は、曇りくらしして、夕方は晴れたる空に、月のいと明かく、星の数も見えたる」と書かれているので、

ここにも月があると考えることも可能かもしれない。先の論文で三田村氏は「長徳二年二月の内裏退出後、小二条宮時代、職時代、三条宮時代を通じて、枕草子の宮仕えの記に、日の光はさしこんでいない。」と指摘されたが、長徳元年の道隆喪中の期間と職御曹司時代に、日の光のかわりに輝く月の光はどんな意味をもっているのだろうか。

初段「春はあけぼの」では「夏は夜、月の頃はさらなり」と、最初に明るいう月夜を評価しながら具体的な描写はせず、闇夜に光る螢の動きを印象的に書き記している。また、「秋は夕暮れ」の情景を

付表：『枕草子』の月の用例分布

季節	章段	月	明き月	有明	漢詩	和歌
春	2	3	2		1	
	日記2	3	2		1	
夏	3	4				
	随想2	3				
	日記1	1				
秋	6	11	4	4	2	1
	類聚1	1	1			
	随想2	5	1	3		1
	日記3	5	2	1	2	
冬	3	6	1	2	1	
	随想2	5		2	1	
	日記1	1	1			
不明	13	23	8	4	2	3
	類聚4	5	2			
	随想6	9	3	3	1	1
	日記3	9	3	1	1	2
計	27	47	15	10	6	4

・「章段」は、月の描かれる章段の数と章段の種類による内訳数

・「月」は、「有明」も含めて月が出現する全回数

詳細に描き、仲秋の名月を描いていない。しかしながら『枕草子』本文中には月夜が多く取り上げられており、月の用例数は有明を入れて全四七例を数える。そのうち季節不明のものが約半数、残り二四例の月の時節は四季のすべてに及ぶが、秋が最も多い。秋の月の出現箇所を確認すると、類聚的章段、随想的章段、日記的章段のすべての種類の章段にわたり、また漢詩や和歌の句に引用されたり有明の月が描かれたりと、他の季節に比べて情景のバリエーションも多い（付表参照）。

そこで本稿では、三代集でも秋巻に最も多く詠まれる月を『枕草子』における秋の代表的な風物として取り上げ、季節不明の月や秋以外の季節の月も含めて考察していきたい。『枕草子』の月の本文例を見てみると、「有明の月」か「明かき月」と記される例が特に多いので、その二つに分けて検討する。

三 有明の月

月は 有明の、東の山ぎはほそくて出づるほど、いとあはれなり
〔能因本〕 月は有明 東の山の端にはほそうていづるほど、
あはれなり
(二三五段)

「月は」と題する章段がこの一文であることから、作者の有明の月に対する思い入れの強さが推し量られる。有明の用例は『枕草子』に一〇例あり、これは『源氏物語』の月の全用例数二〇一に対する有明の一二例⁵⁾と比較してその出現割合が圧倒的に多い。季節は秋と冬で、春夏には見えず、一〇例中八例が随想的章段に描かれている。

有明の月の先蹤としては『万葉集』に三例がある。そのうち二例に「九月の有明の月夜」が詠まれ、それぞれの歌は『人麻呂集』と『家持集』に採録されている。現存「人麻呂集」は後代の成立と見られるが、「長月の有明の月」という歌句は柿本人麻呂が最初に詠み、大伴家持がそれに倣って以来詠み継がれ、有明の月といえは九月の秋の月というイメージが定着したものと考えられる。なお漢詩には残月という言葉があり和歌の題にも見えるが、内田順子氏は、「有明の月」は明け方の空にまだある月であり、それを和歌の世界で「残っている」と表現することが、「有明の月」を歌の題などで「残月」ということにつながった⁹⁾と考え、それは中国唐代の「沈もうとする月」の意の「残月」とは異なるという。

素性法師が「いま来むといひしばかりに長月の有明けの月を待ちいでつるかな」（『古今集』恋四・六九一）と詠んだように、明け方の空に見える有明の月は日本文学においては逢瀬と結びついていた。有明の月は『後撰集』にも四例見え、秋の巻に定型の「長月の有明の月」で二首、恋の巻に二首採録されている。『源氏物語』では、光源氏と朧月夜の君との逢瀬の場面、薫が大君を見初めた場面、匂宮と浮舟が宇治川を舟で渡る場面などに有明の月が出ていた。また『和泉式部日記』では、有明の月の手習文に始まる女と宮との五首贈答歌の場面が、二人の恋の山場となっている。

逢瀬を照らす有明の月は『枕草子』随想的章段にも描かれる。初秋七月の夜の場面（三四段）は次のように始まる。

七月ばかり、いみじう暑ければ、よるづの所あけながら夜も明かすに、月のころは、寝おどろきて見出だすにいとをかし。關

もまたをかし。有明はた言ふもおろかなり。

まだ残暑が厳しく寝苦しい夜、目覚めた時に思いがけず見た月を取り上げる。まずは望月前後の明るい月が非常に趣深い、闇夜もいいというのは、月の有無が主眼ではないのだろう。さらに有明の月なら最高だというところで、ここは独り寝の夜ではないと想像される。案の定、この後に逢瀬の後の男女のなまめかしい姿態が描写されていく。

薄色の裏いと濃くて、上はすこしかへりたるならずは、濃き綾のつややかなるが、いと萎えぬを、頭こめに、引き着てぞ寝たる。香染の単衣、もしは黄生絹の単衣、紅の単衣袴の腰のいと長やかに、衣の下より引かれ着たるも、まだ解けながらなめり外の方に、髪のうちたたなはりて、ゆるらかなるほど、長さおしはかられたるに、二藍の指貫に、あるかなきかの色したる香染の狩衣、白き生絹に、紅のとほすにこそはあらめ、つややかなる、霧にいたうしめりたるをぬぎ、鬢のすこしふくだみたれば、烏帽子の押し入れたるけしきもしどけなく見ゆ。

傍線部のような描き方は随想的章段によく見られる、語りながらイメージを膨らませていく文体であり、物語的な場面を創造していく過程そのままを読者に示すものだろう。

次の、九月の有明の月の情景を描く章段（一七三段）は、冒頭から物語的に始まる。

ある所に、なにの君とかや言ひける人のもとに、君達にはあらねど、そのころいたうすいたる者に言はれ、心ばせなどある人の、九月ばかりに行きて、有明のいみじう霧り満ちておもしろきに、名残思ひ出でられむと、ことばをつくして出づるに、今はいぬらむと、遠く見送るほど、えも言はず艶なり。

別れが名残り惜しい男は、この後、出ていくふりをしてもう一度女に思いを伝えようと考え、『伊勢物語』第二三段の昔男さながら庭に忍んで女の様子をうかがっていた。そして「有明の月のありつつも」と人麻呂の歌を口ずさみつつ覗き込んだのだが、男の目に飛び込んできたのは、「髪の前にも寄り来ず、五寸ばかりさがりて、火をさしともしたるやうなりける」もの、すなわち有明の月に照らされた女のかもじがずれた頭だった。前半の恋の情趣は一気に崩れ、続く「月の光もよほされて、おどろかるる心地しければ、やをら出でにけり」という一文で読者の笑いが呼び起こされる結末となる。

「有明の月」は後朝の別れの場を盛り上げるのに最適な月であり、『枕草子』もそのように扱っていたのだが、この作品はそれだけでは終わらない。時に優雅な恋の話に落ちをつけ、茶番に仕立てあげて笑いを提供するのである。「あさましきもの」（九三段）の次の例もその典型と言えるだろう。

かならず来なむと思ふ人を、夜一夜起き明かし待ちて、暁がたに、いささかうち忘れて、寝入りにけるに、鳥のいと近く、かかと鳴くに、うち見あげたれば、昼になりにける、いみじうあさまし。

信頼している男の訪れを一晩中待ちかねていた女は、暁方にふと気がゆるんで寝入ってしまった、鳥に起こされた時にはすっかり昼になつていたという。その間に男が訪ねてきたのかどうか、有明の月の時刻もとうに過ぎていて、自ら呆れ返るしかない。『枕草子』は物語的世界を提示しながら、物語のように運ばない現実世界の事態を暴き出す。読者の反応を期待するストーリー展開は、作者の独創であると同時に定子後宮で共有されていた笑いの文化に依拠したものと考えられるのではないだろうか。『枕草子』には、有明の月夜を楽しむ女房たちの事態も次のように描かれている。

有明のいみじう霧りわたりたる庭に下りてありくを聞きしめして、御前にも起きさせたまへり。うへなる人々の限りは出であ、下りなどして遊ぶに、やうやう明けもて行く。「左衛門の陣にまかり見む」とて行けば、我も我もと問ひつぎて行くに、殿上人あまた声して、「なにがし一声秋」と誦してまゐる音すれば、逃げ入り、物など言ふ。

〔職の御曹司におはしますころ、木立などの〕七四段

大路近なる所にて聞けば、車に乗りたる人の、有明のをかしきに簾あげて、「遊子なほ残りの月に行く」といふ詩を、声よくて誦したるもをかし。

（一八五段 能因本この段なし）

大胆にも左衛門の陣まで繰り出した若い女房たちは、朗詠しながら歩いてくる殿上人たちに遭遇して逃げ帰る。また、邸の外を殿上人たちの車が通るのを察知して耳を澄ませ彼らの朗詠を聞く。七四

段は職御曹司に定子が滞在していた時期の記事であるが、女房たちは有明の月の情緒を、その場に居合わせた殿上人たちと共に味わい楽しんでいる。両段共に殿上人の朗詠が記されることよって、有明の月の下で繰り上げられる情景が、後宮文化を記す一場面となつているのである。

有明の月を愛でる場は大内裏の周辺に限らない。次の「宮仕え人の里なども」（一七二段）は冬の月だが、里下がりしている女房の家に、宮仕え先で交流のある男性貴族たちが訪ねてきて暁まで居明かしている。

夜中、暁ともなく、門もいと心かしこうももてなさず、何の宮、内わたり、殿ばらなる人々も出であひなどして、格子なども上げながら、冬の夜をる明かして、人の出でぬる後も見出だしたるこそをかしけれ。有明などは、ましていとめでたし。笛など吹きて出でぬる名残はいそぎても寝られず、人の上ども言ひ合はせて、歌など語り聞くままに寝入りたるこそをかしけれ。

また、「十二月二十四日、宮の御仏名の」（二八三段）に描かれる有明も冬の月だが、その描写は秀逸である。中宮御所で行われた仏名会に参加して暁方に牛車で退出する一組の男女を、冬の有明の月が照らしている。屋根に積もった雪と軒先に連なる氷柱に月光が反映し、白銀の屋根から水晶の滝が落ちているような美しさ。男が繰り返し朗詠する「凜々として氷鋪けり」は十五夜の秋の詩なのだが、当場面に適合し、ずっとその情景を味わっていたという女の思いがいつのまにか作者自身の思いに転じている。中宮の法事に参加し

た後で牛車に男と同乗している女は、清少納言自身もしくは同僚女房なのだろう。目的地に到着するのが残念だと言っていることから、男が女を自邸に送り届けている途中の出来事だと考えられる。これは、後宮行事に付随して経験された一場面であり、二人の關係は後宮を介した公の關係だと推測される。

以上、他の平安文学と同様に、『枕草子』の有明の月も逢瀬の場面と結びつくことに変わりはないが、それぞれの章段を分析してみると、物語的情趣や笑いを共有する場で語られる月、同僚たちと一緒に庭に下りて観る月、訪問してきた男性貴族と共に観る月など、月の風情を宮廷人と共に味わうものであった。また、月を見る場所が里邸であっても、それは宮仕え人の家に殿上人が訪ねて来る場面であった。つまり、『枕草子』の有明の月は宮仕え生活と結びつく場のものであり、殿上人たちをも巻き込んで、逢瀬の情趣を王朝文化の一つとして演出していたと考えられる。

四 明かき月

月のいと明かきに、川をわたれば、牛の歩むままに、水晶などのわたるやうに、水の散りたるこそをかしけれ。(二二六段)
〔能因本〕「月のいと明かき夜川を渡れば」

十五夜前後の最も明るい時期の月は、古代では忌むべきものという風習があったが、照明のほとんどない時代では、昼間と同じように出歩く利便を提供してくれた。清少納言も明るい月夜が大好きだったようで、牛車で川を渡った時に跳ね上がった水しぶきが、月光に照らされて水晶の欠片と化す描写は印象的である。

前節の「有明の月」も場面によつては「いと明かき」と描写されることもあるので、「明かき月」が必ずしも望月前後とは限らないが、「有明の月」が逢瀬の後を示唆するのに対して、「明かき月」は逢瀬の始まりを期待させる。たとえ訪ねてくる恋人のあてのない場合でも、月の明かき夜は心あくがれるものである。まずは類聚的章段の用例を見てみよう。

月のいと明かき面に薄き雲、あはれなり。

〔雲は〕一三七段 能因本この段なし

笙の笛は、月の明かきに、車などにて聞き得たる、いとをかし。

〔笛は〕二〇五段

にげなきもの 下衆の家に雪の降りたる。また、月のさし入りたるもくちをし。月の明かきに屋形なき車のあひたる。

〔四三段〕

明るい月に薄くかかる雲をじつと見つめているのは女で、逢瀬の時を待っているようにも感じられ、月夜に牛車で聞いた笙の笛は、それを吹く男性との交渉を期待させる。「にげなきもの」では、月光が差し込むのが下衆の家では照らす甲斐がないし、屋形のない粗末な車と明るい月夜に出会っても優雅な恋のやり取りは望めないということだろう。これとは逆に、月が照らすにふさわしい家が次の随想的章段で描かれる。

荒れたる家の蓬深く、律はひたる庭に、月の隈なくあかく澄みのぼりて見ゆる。また、さやうの荒れたる板間よりもり来る月。

(一本二五)

「荒れたる家」は下衆の家ではなく、住人はおそらく主人のいな貴族女性で、明るい月に誘われて訪れる男性との交渉が期待されるのだろう。以上は類聚的章段と随想的章段の用例だが、有明の月の用例が随想的章段に多かったのに対して、明かき月を扱った章段は日記的章段に多い。まず、月の明かき夜に登場する男性二人を見つみよう。

「さても夜べ、明かしも果てで、さりとともかねてさ言ひしかば、待つらむとて、月のいみじう明かきに西の京といふ所より来るままに、局をたたきしほど、からうじて寝おびれ起きたりしけしき、いらへのはしたなき」など語りて、笑ひたまふ。

(「返る年の二月二十余日」七九段)

「月のいみじう明かき」夜に局をたたいたと語るのは藤原斉信で、この時、清少納言はなんらかの理由で居留守を決め込んでいた。斉信はその状況を恋愛の訪問にかこつけて、清少納言にふられたことを笑いながら語っている。なお、章段の日付は二月二十余日なので、月は春の有明の月だったことになる。次は大納言伊周である。

夜中ばかりに、廊に出て人呼べば、「下るるか。いで、送らむ」
とのたまへば、裳、唐衣は屏風にうちかけて行くに、月のいみ

じう明かく、御直衣のいと白う見ゆるに、指貫を長う踏みしだきて、袖をひかへて、「倒るな」と言ひておはするままに、「遊子なほ残りの月に行く」と誦したまへる、またいみじうめでたし。

(「大納言殿まゐりたまひて」二九三段)

明るい月の光に照らされた伊周が、得意の漢詩を朗詠しながら付き添い送ってくれた思い出である。これは作者の記憶に強く残る光景だったのであろう。作者は斉信と伊周、当代きつての貴公子たちとの後宮での疑似恋愛を、明るい月夜の中に書き記した。次は三巻本の独自本文だが、定子との交流を記した話である。

八月十余日の月あかき夜、右近内侍に琵琶ひかせて、端近くおはします。これかれ物言ひ、笑ひなどするに、廂の柱に寄りかかりて物も言はで候へば、「など、かう音もせぬ。物言へ。さうさうしきに」と仰せらるれば、「ただ秋の月の心を見はべるなり」と申せば、「さも言ひつべし」と仰せらる。

(「職におはしますころ」九六段)

仲秋の名月の頃、職御曹司で『白氏文集』の「琵琶行」を引用した定子と清少納言のやり取りが記されている。¹⁵同じく『白氏文集』を応用した香炉峰の雪の段では、定子の出題を受けて清少納言が行動していたが、ここでは清少納言の態度が定子からの問いかけを導く展開になっている。その他の日記的章段の「明かき月」には、村上天皇に仕えた兵衛の藏人が、和歌のかわりに漢詩で「雪月花の時」と奏した春の用例(一七五段)がある。

さて、以上に見てきた日記的章段で注目したいのは、月が描かれる場面で多く見受けられる漢詩の引用や朗詠である。十五夜すなわち明かき月は漢詩における秋の代表的な題であった。平安中期に成立した『千載佳句』の時節部には八月十五夜の題で漢詩が収められ、『和漢朗詠集』の秋の部には十五夜と月の題が入っている。そして言うまでもなく、漢詩での応酬や朗詠を楽しむ文化は定子後宮のオリジナリティーを示すものであった。

また、「明かき月」の夜は逢瀬を導き、「枕草子」においては後宮の人々の交流を促す時間であった。たとえば、先に見た斉信と伊周の登場場面では、清少納言と上流階級の男性との交流が記されており、「十月十余日の月いと明かき」(二五五段)は年時不明だが、初冬の十五夜近いころに夜歩きに出かけた後宮女房たちの遊びが月の光に照らされ描き出されている。これらことから、「明かき月」は定子後宮の文化的活動を誘導するものと考えてよいだろう。

以上、「枕草子」に描かれる代表的な月として、「有明の月」と「明かき月」を取り上げ検討してきた。後朝の別れを照らす「有明の月」は日本文学に多く描かれる情景であるが、『枕草子』では時に滑稽譚に転じて語る。それは定子後宮で共有された笑いの文化と見做される。一方、漢詩文で多く詠まれる「明かき月」は、『枕草子』で殿上人に朗詠され、清少納言も引用していたが、それもまた定子後宮を象徴する文化活動であった。さらに「有明の月」「明かき月」の下では、後宮女房と宮廷貴族との交流場面が繰り広げられていた。「有明の月」と「明かき月」、日本文学と漢文学を代表する二様の月が道隆薨去後の『枕草子』日記的章段に描かれるのは、栄華期を過ぎた定子の後宮文化を作品内に蘇らせるためだったと考える。

『枕草子』の秋に輝く月の光は、表舞台に立つことから遠ざけられた定子後宮を照らす王朝文化の光として機能していたのではないだろうか。

最後に「成信の中將は」(二七四段)について触れておく。当該章段は、実在人物の「有明の月」の別れで始まる歌物語的な場面から、一転して兩夜の訪問者の非難へ、そして月の明かき夜への熱い思いを繰り返し述べる随想的叙述へと転換していく。その内容展開については検討すべき問題が多々存在しており、詳細な分析は今後の課題としたいが、一章段中の月の用例数が最も多く、記事年時が『枕草子』の最終年にあたることから、本稿で扱ったすべての月の場面を包括し、俯瞰的に述べる視点をもつ章段だと考える。¹⁷⁾

月の明かき夜に惹かれる作者の脳裏には、後宮女房たちと共有した物語的場面や、男性貴族との漢詩の応酬や朗詠の思い出が様々な浮かんでいたことだろう。それは清少納言が最も活躍した時代の、定子後宮の独創的な文化の記憶であった。栄華の時代が通り過ぎて、「枕草子」の世界には定子後宮を象徴する価値ある文化活動が繰り広げられ、その場面を明るく照らしていたのである。

注(1) 拙稿『枕草子』の雪景色―作品生成の原風景―(『十文字学園女子

大学紀要』二〇一六年三月)

(2) 拙稿『古今和歌集』と『枕草子』―「桜」の描写の比較から―(『十文字学園女子大学紀要』二〇一七年三月)

(3) 『古今集』秋歌上巻の文屋朝康の歌「秋の野に置く白露は玉なれやらぬきかくる蜘蛛の糸すぢ」

(4) 『枕草子 表現の論理』第2章(有精堂、一九九五)

(5) 用例数は『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院 二〇一四年）による。有明のうち五例は「有明の月」で月の用例数と重なり、「有明の月影」と「有明の君」が各一例ある。

(6) 次節で引用する「返る年の二月二十余日」（七九段）に描かれる月は春の有明の月といえるが、本文中には「月のいみじう明かき」と記されている。

(7) 『万葉集』採録歌は卷十に載る次の三首。

二二二九 白露を玉になしたる九月の有明の月夜見れど飽かぬかも

二三〇〇 九月の有明の月夜ありつつも君が来まさば我恋ひめやも

二六七一 今夜の有明の月夜ありつつも君をおきては待つ人もなし

このうち二三〇〇番歌は、『人麻呂集』に「九月のありあけの月のありつつも君来まさずは我恋ひむかも」として、また二二二九番歌は、『家持集』に第二句「たまにぬきても」として収録されている。

(8) 現存『人麻呂集』の成立は、『古今和歌六帖』から『拾遺集』の時代とされる（『新編国歌大観』解説）。『家持集』も同時代の成立である。

(9) 「残月考」有明の月との関わりを中心に」（『和漢比較文学』二〇一九年八月）

(10) 当該部分については本文不審として、有明の情趣を損なわない訳を試みる注釈書もあるが、前半の物語的雰囲気覆し、笑いを触発する『枕草子』の方法としてとらえたい。

(11) 冬の月については、『元輔集』に「いざかくてをりあかしてん冬の月春の花にもおとらざりけり」とあり、清少納言への影響も考えられよう。

(12) 『和漢朗詠集』十五夜「秦甸ノ一千余里 凜々トシテ水鋪ケリ 漢家ノ三十六宮 澄々トシテ粉篩レリ」を引く。なお、本間洋一氏は、月光と雪・霜・氷などを白色の属性から関連的に用いる王朝漢詩の特徴を指摘する。（『王朝漢詩「月」の比喩表現―資料ノート―』『北陸古典研究』一九八六年七月）

(13) 廣田正氏は、「枕草子の月の用例においては、月を背景にした後朝の別れを描いた章段は少なく、清少納言にとつての別れも描かれていない」と指摘する。「枕草子「過ぎにし方恋しきもの」攷」月の明かき夜について」（『語文』一九七六年七月）

(14) 高橋亨「竹取物語と漢詩文「月をめぐって」（『国文学 解釈と教材の研究』一九九三年四月）、三浦真貴「月を忌む―その源流―」（『瞿麦』二〇〇六年二月）等。

(15) 清少納言が引用した「秋の月の心」の意味については、定子の境遇への言及と考える見方もあるが、本稿ではその説はとらない。岡田潔「秋の月の心を見侍るなり」考―『枕草子』一〇〇段「職におはします頃」を読む」（『女子聖学院短期大学紀要』一九九六年三月）等。

(16) 月が描かれる日記的章段一〇段中の五章段に漢詩の引用、二章段に和歌の引用がされている。随想的章段では一二段中漢詩は二章段、和歌は二章段に引用されている。

(17) 当該章段については様々な先行研究があるが、章段全体をまとめる和歌に着目した古瀬雅義「成信の中將は 章段における対比の構成―和歌の表現と雨の言説を視点にして―」（『日本文学研究ジャーナル』第15号二〇二〇年九月）が最新のものである。月の明かき夜が過去の輝かしい記憶を想起させるものだからこそ、それを打ち消す雨夜は徹底的に否定されていると考えられよう。

※『枕草子』の本文ならびに章段数は『新編日本古典文学全集』（小学館）により、能因本文との校異は根来司編著『新校本枕草子』（笠間書院 一九九一年）を参照した。また、『万葉集』『人麻呂集』『家持集』『元輔集』の本文は『新編国歌大観』に、『古今和歌集』『和漢朗詠集』の本文は『新編日本古典文学全集』による。